

第2章 銃後

子どもたちの生活

戦場で散った父からの手紙

近藤健治さんのお話から

○出征 軍隊の一員として戦地に行くこと。

○疎開 子供や病人、お年寄りなど戦争の被害を受けやすい人を都市からより安全な地方に移り住まわすこと。

○供出 国などの要請によって物資を差し出すこと。特に、民間の物資、主要食糧 農産物などを、一定の価格で半強制的に政府に売り渡すようにさせることをいう。

○国民学校 昭和十六年の国民学校令というきまりにより、これまでの小学校を改めて成立した、皇国民の育成をねらいと

父は私が二歳、昭和十二（一九三七）年八月に中国に出征しました。そして翌十三年二月十八日に二十八歳の若さで戦死しました。父の遺骨は五月に戻り、母と私は遺族となりました。

そして、母と私は、昭和十五年に住みなれた大阪から北海道の親戚を頼り、岩内、士別、剣淵と、転々と疎開しました。

戦争中は、物資の不足が生活を苦しめていました。小学校二年生のときには夏休みを利用して、いたどり狩りをしました。いたどりという、山に生えている植物の葉っぱを取って、軒下や庭でむしろを敷いた上で天日干しすると、からからになります。それを、かますという袋に入れて、国に供出し、たばこの代わりにして戦地へ送りました。

昭和十九年、国民学校二年生のころに、私たちは学校の先生からプールで水泳の手ほどきを受けていました。ピーツと笛の音がして、「みんな、早くプールから上がりなさい」と言われ、校庭に整列すると、校長先生が、「今、〇〇君のお兄さんが最後のお別れに学校の上を飛びます。みんなで大きく手を振るように。」と言われました。上を見ると、雲の間から飛行機の編隊が見え隠れしながら飛んでいました。「うわーっ、すごいな、これから戦地に行くのだ！」とみんな語っていました。そのときに、ごうごうと爆音が聞こえて、学校の校舎の屋根すれすれのところ、日の丸がついた飛行機が低空飛行でやって来ました。羽をふりながら飛んで来ましたので、こちらに傾いたときに乗っている人が見えました。あれがあのお兄ちゃんな

する教育機関。

- 軍艦 海軍の艦艇で、戦闘力をもつもの。戦艦・巡洋艦・航空母艦・潜水母艦・水上機母艦・砲艦などをいう。
- 水柱 水が吹き上がった柱のようになったもの。
- 歩哨 警戒・監視にあたる兵士。

のだなどみんな言いました。「お兄ちゃん、さようなら！」とだれかが叫びました。私たちは、先ほどよりも強く、ちぎれるほどに飛行機に手を振りました。

私は絵が得意でしたので、国民学校二年生のころ、教員室によく私の絵が貼られていました。どういう絵を描いたかというところ、戦争の絵でした。軍艦と戦闘機が戦い、水柱が上っているものです。校長先生に「近藤、おまえは絵がうまいな、また別な絵を描けよ。」とほめられると、兵隊が歩哨で立っている絵や戦車の絵、飛行機の絵、軍艦も描きました。

母は卵売りの行商をしながら、女手一つで私を小学校から中学校へ進ませてくださいました。

母は朝早くから農家をまわり、産み立ての新鮮な卵を旭川の料理屋や市場の肉屋に卸していました。あのころ、剣淵から旭川まで汽車で片道二時間半はかか



イメージ図

疎開先での作業

○軍隊手帳 元陸軍下士官・兵に付与し、その身分を証明した手帳。
○召集令状 人を軍に呼び集める命令書。あわい赤色の紙を用いたので「赤紙」という。

りました。そのような母の姿を見るにつれ、私も下校すると、野菜や魚の仕入れ、庭の草取り、廊下の拭き掃除など、できる限り手伝いました。

その母は、昭和五十七年に八十二歳で亡くなりました。母の古いたんすから父の手紙の束が入った奉公袋が見つかったのはその後です。

奉公袋とは、兵隊が、軍隊手帳や勲章、証書、召集令状、その他貯金通帳など大切なものを入れて、肌身離さず持ち歩いたものでした。この袋を母は大事に持っていたのです。

また、父が戦争に行っていた約半年の間に、父から届いた手紙は八十通以上にも及びました。死と向かい合った凍てつく寒空の下で、ふるさとの妻と子への手紙をどんな気持ちでしたためのでしょうか。

父から母にあてた最後の手紙の日付は昭



イメージ図

和十三年二月九日になっています。

「おまえも、健治も達者で安心した。今日は二月九日、おまえとキューピーを抱いた健治の写真を郵便物とともに受け取った。これから四十日ぐらいは手紙を出せない。留守中よろしく頼む。体を大切にしなさい。」

届いた茶封筒には、軍事郵便で検閲済みの印が押され、激戦地での状況は一切書かれていませんでした。軍の行動はすべて極秘だったからです。

そして、もう一通の手紙は私が二歳のときに父が送ってくれたものでした。赤い印で日本の旗と海軍の旗があり、軍事郵便でした。この手紙は全部片仮名で書いてありました。きっと私が小学校に上がったら読んでくれるだろうと思ったのでしよう。

「健治ちゃんへ、二月二日、お父さんより。健ちゃん、お母さんと二人で仲よくしてね。お母さんの言うことをよく聞くのですよ。早く大きくなれ。悪いことをしてはなりません。それから、お母さんのそばから離れてはいけません。けがをしてはいけません。」

母に対する手紙には、健治をけがさせるな、健治から離れるな、風邪を引かせるなということが必ず書いてありました。今、私が読んでも父の愛情を深く感じます。

みなさんには、それぞれ夢があると思います。それに向けて努力をすることが大切だと思います。やはり、生きていることの尊さが大事だと思います。

DATA

平成23年度豊平区平和事業
聞き取り

- ・平成23年11月4日
- ・平岸西小学校



近藤健治(こんどう・けんじ)さん

- ・昭和11(1936)年生まれ
- ・札幌市豊平区在住